

CICE では、日下部達哉教授と、朝倉隆道研究員、原田亜紀子研究員に対談を行っていただきました。

CICE の先進性とは

CICE は、設立以降 26 年間、教育開発や比較教育学に関する研究・実践を行ってきました。その一つとして、和文と英文の学術プラットフォームである、『国際教育協力論集』、Journal of International Cooperation in Education の発刊があります。このうち英文については、インハウス・ジャーナルであったものをオープンアクセス化し、2023 年度から英国エメラルド社から発刊しています。

日下部：CICE では、これまで 24 号出版してきた英文ジャーナルをオープンアクセス化して、英国エメラルド社から出版を始めました。25 号出版の仕事はいかがでしたか？

朝倉：私が CICE にきたのは、Journal of International Cooperation in Education (JICE) の出版に向け、Emerald 社（英国の学術出版社）との契約が成立する直前でした。日本のアカデミアは、どうしても国外の研究者との関わりが希薄になる傾向があるように思います。しかし、JICE の編集業務に携わり、JICE という研究のハブを通して、アジアやアフリカ、欧米の研究者と関係を築くことができました。こうして培ったネットワークを活用し、自身の研究に対する助言をもらうこともあります。この編集に携わってみて初めて、世界各国・地域の研究者との繋がりができ、学術のグローバルな広がりを体感することもできました。そして何より、教育学系の大学院の教科書で読むような先生方が寄稿してくださり、直接アドバイスをいただけることに感動いたしました。それに加えて、私と同年代の早期キャリアの研究者の論文が、発刊されてすぐに 1000 ダウンロードされたり、被引用数を稼いでいるのはとても刺激をうけます。

原田：JICE の編集業務においては、デスク・レビューという、レビュワーに回す前の編集会議で、毎週のように数本の論文を読む機会があるので、論文の評価をする過程で、自分自身の研究を見直す良い機会になっています。大学なのだから当たり前なのですが、CICE では、研究そのものが中心的な業務であり、自身の業績にも直結していると思います。また、編集業務の合間に和気あいあいと話しながら身につける“耳学問”がとても楽しいです。CICE では、ライターズ・ワークショップやセミナーを開催していますが、そこでやり取りされるコメントも、自分自身の研究にも当てはまると思いながら参加しています。

研究と業務の関係（研修業務）

CICE では、JICA や IICBA といった国際機関、また各国政府から受託し、研修を行っています。教育行政官、ときには大臣、閣僚を広島や東京に招聘し、日本の教育を視察してもらう、またそれらを政策に活かすにはどうすればいいか、といったことについて深い議論を展開するような事業を行っています。

日下部：CICE では発展途上国の行政官、ときには大臣を招いて研修するのですが、携わってみて感想を聞かせてください。

朝倉：私が担当しましたので私から。CICE では、JICA 研修などを通して、教育行政官や、時に閣僚とも関わる機会があります。彼らに、自身の研究成果からダイレクトにメッセージを伝えたり、また教育協力を研究する立場として、彼らの思考を知る貴重な機会にもなります。また私自身は、教育開発の先端を学んだのであれば、先方に伝えたいという思いがあります。最近では、企業などの非政府アクターも交えて研修を行っており、自分自身の研究のインフォーマントとのつながりを作ることもできました。加えて、研修やワークショップの企画・運営によって、今後、大学で働く際に役立つ力を身につけられていると思います。

異分野からの参入

CICE にやってくる研究員たちは、国内外の大学院で博士号を取得した後、すぐに来る人もいれば、国際機関、企業、教員としての経験を積んでから来る人もいます。CICE は多様な人材を受け入れ、多くは研究者として巣立っていきますが、国際機関の専門家、各国大使館の専門調査員など外交の現場に赴く人たちもいます。

日下部：お二人とも、企業人と教員からの転身でしたが、CICE で働いてみて、率直な感想を聞かせてください。

朝倉：私は企業のシンクタンクから CICE にきましたが、大学と企業の違いは、自由に時間を使えるところだと思います。もちろん忙しい時期もありますが、論文や著書の執筆を進めながら、業務を行っています。また、インターンの学部生や院生とも関わることが多く、素朴な疑問に答えつつ、自身の研究分野を見返し、理解を深めるきっかけになっています。また、大学では当たり前のように先生方が申請している科研費ですが、異分野から参入してきた私は不安がありました。しかし、先生方に徹底した申請指導を受けることができ、採択されました。

原田：私は専門がデンマークの民主主義教育で、加えて学校教員からの転身だったので、こんな異分野でやっていけるのか、心配もありました。しかし、実施に CICE にきてみると、インドネシアでのレッスン・スタディの研究など、自身の経験を活かせる場がありました。また、CICE が構築した大学間ネットワーク Africa-Asia University Dialogue (AAD) の研究者とのコミュニケーションを通して、日本の教育を相対化する視点を得たことです。各国・地域の教育を知り、比較の視点が養われていっているように思います。私も、科研費や、学内の研究助成金申請の指導を受けることを通じて、研究者の視点が身についたように思います。

CICE に在籍する研究員たちは、センターが推進する研究プロジェクト、国際教育協力事業に携わることで、これまでの研究や職務経験との相乗効果が生まれ、研究面や業務面での特色を持つことができるため、CICE 研究員の経歴は、独特かつ有望なキャリア・パスとなっています。任期や待遇などは、研究者公募情報ウェブサイト等に掲載する CICE 研究員募集要項を参考にしてください。